人夫出し初体験のころ

毎日が立食パーティーだった

立ったままメシを食う体験をさせてくれたのは人夫出し飯場だった。いまからざっと二十年前、大阪のことである。

戦争中からずいぶんいろんなところを歩いていろんな暮しをしたが、メシを立って食うのは、火事場の手伝い、葬式の手伝い、祭りの最中など、特殊非常な場合以外は知らなかった。そして、特殊非常な場合の立ち食いはきまってニギリメシで、醤油めしや塩味のあつあつの大ぶりなニギリメシを片手に、残った手にたくあんという格好で食うニギリメシはいつでもうまかった。

しかし、その飯場の立ち食いは特殊でも非常でもない毎日、朝めし夕めしを立って食うのである。

これは――と思った。長くいる気はしないところだな、と。

飯場の寝る方の部分は大部屋で、まんなかに通路があって両側が二段の寝棚、畳一枚が一人の領分のきまりで四十人ぐらいのスペースはあったろう。それにくらべる食堂部分がせまい。せまいから椅子、テーブルを置くわけにいかず、壁の適当な高さに板をとりつけてテーブル代りにしているのだ。つまり寝るのは寝棚、メシは食事棚である。

食事棚は巾三〇センチぐらい。食堂の二方の壁にとりつけてある。つまり、大工の使うカネ尺のように棚

はできている。

私たちはそこにメシ、汁、おかずのどんぶりや皿をのせて食うわけだが、ほんとに鼻がぶつかりそうな壁に向って食うのはなんとも味けない。それに、壁に向ったら背中の方角になる食堂中央の台の上にメシビツ、汁鍋が置いてあってめいめい手盛りするのだから壁と向き合う必要もない。

で、メシを食う姿勢はゆゆしきものだった。

ゆったりした気分の夕めしを例にとればこんな具合だ。

食事棚には諸式でとった酒のビン、コップまたは湯呑みがある。おかずの皿がある。メシや汁まで一度に並べてしまう奴もいる。だがそれで食事棚と真正面に体を向けてしまってはみんなの顔が見えない。話ができない。そこで自然と一定の姿勢ができあがる。

箸を持った右手のひじを棚について体を半ばねじって、みんなそうして顔が見えるようになってしゃべりながら飲みまた食うのだ。

人夫出しだから、三人五人ずつちがう現場へ行かされて帰りの到着もバラバラなのが、そこで今日のあれこれを話し合う。帰ってすぐ風呂に行く者はまずいなかった。みんな地下足袋、長靴をはいたまま、諸式の伝票を書いて酒を受けとるのを最優先するのである。

そうして話がハズむと一時間はたちまちすぎ、また伝票書いて酒を追加して二時間にもなる奴がめずらしくない。

ということは、である。

土方の仕事開始は朝八時。バスや電車に乗って飯場を出るのはその一時間前ぐらいが普通だ。出かける前に立ってメシを食い、バスや電車でも腰かけられないときが多い。仕事は全部立ってやる。そして終るのが五時でまた腰かけられないバス、電車で帰ってさっそくの一杯もメシもやっぱり立っている。

午前十時、午後三時の休憩は各十五分がきまり、ヒルは一時間で現場の適当な場所でメシを食う。これは腰をおろして食うから通算一時間半以外は立ちっ放しの計算だ。夕方六時に帰ってきて飲み食いしゃべって二時間すると八時。まずざっとみて朝から十一時間ほどは立っているわけ。

エライもんだなあとため息が出た。

なにしろ私は一日三食のうち二食は立ってすますという刑務所にもない現実に圧倒されていた。

いまはまあ、そんな飯場はないだろう。

その当時だって、あといろいろと渡り歩いた飯場は

野丁場でも人夫出しでも、立ち食いはなかったのだから。

ところがまことに奇妙な話で、長くいる気はしないと最初に思った立ち食い飯場が、手指十本を何度も曲げたりのばしたりできる私の飯場めぐりのうち、一番長期におちついた記録になっているのだ。いつのまにか毎日の立食パーティーが好きになったらしい。

ニンプを姫妃と思ったこと

立ち食いだけが初体験だったのではない。

大体、人夫出し飯場そのものがはじめて、従って人夫出しという言葉に出会うのもはじめての私だった。

朝、起きて行くと食堂の一隅にある黒板にその日の行先ごとに個人名が書いてある。

布施やら寝屋川やら梅田やら、方角も距離もバラバラで毎日の人数もバラバラ、現場のポーシンは固定しているが、あとは黒板を見てその日の働らき場所をやっと知る。

私がそれをポヤイた。

遠くてもいいから毎日同じ場所の方が仕事しやすい、というわけである。

「何を言うとんのじゃ……」隣り合せの寝間にいるMが せせら笑うように言った。

Mはベテラン、もしも土方に剣道や柔道のような段があるとしたら、土方道五段か六段にまちがいなくなりそうな陽やけ具合であり体つきである。

「人夫出しへきたらのう、行けと言われたとこへ行っとったらエエンじゃ。その代り仕事もチンタラやっとったらエエンじゃ。うちのオヤジかて仕事には責任ないのやからの。人夫出しとはそういうものよ」

ニンプダシ――

現にそこにいて、私はその言葉を知らなかった。ニンプと聞いて「姫妃」と連想するぐらい無知だった。

けれどもMのようなベテランの話と毎日の現実がすぐに人夫出しなるものの正体を教えてくれた。

要するに時代小説に出てくる人入れ稼業ではないか。

大名、旗本の庭へ仲間（ちゅうげん）と呼ばれる下級の屋い人を斡旋するのが人入れ稼業で、その大将は親分、元締めである。

旗本水野十郎左衛門と対立したバンズイイン長兵衛、土佐の大名山内容堂のお気に入りだった相模屋政五郎、こういった実在の人物から小説が作り出した人入れ稼業の親分、元締めは数知れない。

山手樹一郎の小説の一つには、亭主に死なれた美人の

若後家が女ながらに元締めの仕事を継いで、それが山手ごのみの強く賢こい若ざむらいと恋仲になるというのもあった。

武家社会の必要に応じて生れた人入れ稼業が土建業の必要にも応じておかしくない。おかしいのは、昔は人入れだったのがいまは人夫出しと、入れると出すが反対になっていることぐらいである。

というわけで要点はナットク。

元から段々に人夫出しまでくるあいだ、賃金をピンハネされているというのもそんなにハラの立つことではなかった。資本主義、商品とカネの世の中、どんな商品も最初は安くて、仲買いだオロシ問屋だ小売りだと先へ行くほど高くなっている。わが身がその商品であり、自分ではもっと高いネダンに考えたいということはあったけれど、である。

しかし、私の古い記憶、人夫出し飯場に流れてくるようなハメになる以前の記憶に、少しひっかかるものがある。

雨降り休みの日、それをたしかめに図書館へ行った。土方が図書館では似合わないと承知で、知識欲さかんな市民のような顔をしてるつもりで行った。

目標は新聞の縮刷版。

毎日の新聞をそっくりそのまま少しちいさくして、一ケ月ごとに綴じたものである。

記憶としてはざっと十年前、人入れ稼業はマッカーサーに禁止されたはずで、その新聞記事を探しにかかったのだ。

マッカーサーって誰？

知らない人もいるかもしれないがそこまで説明はしてられない。戦争に負けてすぐの日本で天ちゃんのヒロヒト氏よりずっとエラかった占領軍総司令官、アメリカの元帥だ。

お目当てはどうにか探し当てられた。

昭和23年2月12日の朝日新聞。

こんな見出しになっている。

人夫請負を一掃せよ
民主のガン・親分制の温床

記事のなかみを私は手帖にうつした。

――総司令部労働課のスターリング・D・コレット氏は……三月からの職業安定法実施に伴い……次のような談話を発表した。

三月一日から実施される職業安定法によって労働者供給事業は特定の場合を除き一切禁止される、数世紀にわたって害毒を流して来た労働者請負という封建的な社会機構を日本から完全に一掃する上にまたとない機会である……

こういう具合の長い記事をごていねいに全部うつして、飯場の寝棚でベテランのMに伝えた。そして言った。

「この法律はどうなってんだろ？」

「おまえアホとちゃうか」Mはてんで相手にしてくれなかった。「法律があってもなくても、土建屋ちゅうのは人夫出し頼りの商売やないけ、やめられやせんよ。第一おまえ、職安が土方の面倒みてくれるかい、ネゴト言わんと早う寝ニや」

まったく、言われてみればその通り。言われなくてもその通り。

特に威張れることではないが、以後二十年のくらしを通じて、日本の土木建築の業界が人夫出し飯場なしでは成り立たぬと身にしみて知って現在に至る——と書くとリレキ書のようだが実際そういうこと。

少しムツカシク考えてみると

一九六三年とあるから十一年前、古川修という人が『日本の建設業』という本を出している。岩波新書、当時百三十円。いまは三倍ぐらい高くなってるかな。

この古川氏は東大工学部卒業で本を出した当時の職業は建設省建設研究所第一研究部建設経済研究室長だそうで、とても一息では言えないし、言ってもすぐ忘れてしまう長さだが、生まれが一九二五年とあってこれが買ったとき私には実に目ざわりだった。

人夫出し飯場もすでに初体験は遠くなり、こちらもMに負けないベテランになってはいたけれどつまりは土方、飯場でこそナマエもちっとは必要（諸式の伝票なんか）だが釜へくればナマエもいらない。ただのニンゲンで一ン日の仕事さえすればカネにありつく。ドヤでは出まかせに大河内妻三郎とか森繁久作とか言っとけばすむ。

そんなこちらの状態と、長ったらしい肩書きの役人とが同じ年の生まれなんだな。しかも建設業という一つの世界に結ばれて。

親の顔、考えたくもなし、考えたおぼえもほとんどないそいつをこのときは考えた。

同年生まれの古川氏、このヒトの親はせがれに安心し満足していることだろうが、オレの親は可哀想なもんだ——と。それからまあガキ時分のともだちのことなんかも考えさせられて、よくなかったね寝心地が。

しかし、そんな思いをするのが目的で買った本ではない。一番下っぱでも長年くらしている土方社会、そいつを一つ、こちらが体で知ったとは別の角度からベンキョウしてみるのも悪くなかろう、ちょっと手軽に読めそうな本はないかというつもりで買ったのだ。

だから読んだ。

そして次のようなところが印象に残った。

——一体に建設業の数がどれだけあり、その規模分布がどうなっているかという基本的なことがらが、なかなかかんたんにはつかめない……中小・零細な建設業が実はすこぶる多くて、その下層では「企業」の実体が実際上あいまいな場合もある……

たしかにそうだろう。建設業者というのは大臣登録か知事登録かの金看板みたいなものを出しているが、人夫出し飯場のオヤジも全部登録ずみかとなると、カンケイナイヨという顔をしたのもいる。だが、土方の親分が建設業者でないとしたら何なのか。実態はピンハネ業であるとしても。

——建設業はさらに労働力をも常時、直接の形で経営内に保有しない。施主と工事の完成を約するいわゆる元請としての総合工事業と、労働者との間には、雇傭の関係が多くの場合にない……

土木建築のあらゆる工事のもっとも下に人夫出し飯場が存在することを、ここではムズカシク書いてあるのだ。

——これらの事情を、集中的に表現しているのが工事下請の制度である。いわゆる下請制度は多くの産業部門にみられるところで、内容はともあれ形としてはめずらしいものではない。しかし建設工事下請は必要労働のほとんど全体をおおうところに大きな特長がある……

つまり、役人といえどもわかってはいるということだろう。末端に人夫出しあり、の現実を。ただし、ある程度エライ役人ではあっても、わかっている以上には何か実際に人夫出しをなくすように動くことはできない。もう一ケ所、同じことを少しちがう文章で書いてある。

——建設業下請制はその依存率がすこぶる高くほとんど一〇〇%に近いこと……現場における直接労働の提供

という形をとるものが多いことに特長がある。建設業の下請は決して補助的な役割を果すのではなく、主要な工程の主役なのである……

下請の施工業者の下にいるのが人夫出しから現場へ行ってる労働者なのだから、ではそれは主役のなかの主役になるわけか。それにしては安いカネで使われるものだ。また次のところも目を引いた。かつて図書館まで行って手帖にうつした「人夫請負いを一掃せよ」という問題がどうなったかが書いてある。

――下請は労働力の調達者・管理者であり現場労働の監督者でもある。労務供給下請は戦後昭和二二年職業安定法によって一たん排除がこころみられたのであったが、二七年の安定法の一部改正によって実質的には骨抜きになった……

役人ですら骨抜きと言う。それで十分、法律のややこしい文章をひきくらべて見る必要はないと私は思った。現実、人夫出しはいまも生きている。

Nのことその他

八尾、淀川区中島、西淀川区福町、同じく大和田、姫路飾磨、京都西大路、富田林、池田、門真、鶴見区鶴見、埼玉川口、和歌山、住之江区柴谷、京都岡崎、港区八幡屋――

十本の手の指を何べんも曲げたり伸ばしたりと前に書いたが、そいつを全部ならべてみようと思ってもできない。わずか十五、しかも順不同である。

ならべたのをじっと見ていると、そこで知り合ったやつ、そこで起ったこと、どんな現場で何をやらされたか、少しずつだが浮んでくる。まだほかに東住吉の長居公園の近くとか高槻のどこかとかも思い出した。

そして、人夫出し飯場の出入りをくり返しながら徐々に釜ケ崎ぐらしに馴れて、飯場行きが少なくなり、その分だけ釜の拾い仕事がふえ、直行の口もかかってきたのがわかる。

暮れ正月でも梅雨どきでも、飯場へ行かずにしのげなくては半人前だと言われたのはいつだったか。遠い遠いことのようだ。

ごくたまに、立ち食い飯場に長くいるあいだに顔を覚えたNと道で出会う。

Nは酒は強いが人からのおだやかな男で、いまだにどことなく若い。お互いにあの飯場を出て、釜ケ崎で「よう」と言ったが、そのときは夏で、Nは西瓜の切り売り

をやっていた。いまは店の場所を移して全体に親しめない感じになり、ものもマズそうな大寅が銀座通りの角にあったとき、その前でNは店を出していたのだ。

変り身の早さにびっくりしたが

「なんでもエエやんけ、おのれの気の向いたことして生きとりゃあ……」

と言われたのをこのごろ思い出す。それは私が地下足袋をはかなくなったからではなくて、そう言って笑ったNが、また現場へ出はじめてアタマに怪我をして、何年になるか、長いこと病院通いをしているからなのだ。

寝ると食うとはどうにかできているとはいえ、Nが気の向いたことをして生きているのでないのは明らかである。

いつ会ってもユーウツそうで、どことなく若いのはいいが笑顔がさびしい。飲もうかと誘っても首をヨコに振る。

同じ飯場にいたPが妻子三人かかえて神戸の団地住いで、いろいろ免許もとった一人前のトビになってる話や、ボート狂いでマージャンくろうとのTが鉄筋屋の親方になってる話や、Nが同じことを言うからこっちも同じことを答えて別れるのだが。

おそらく、人夫出し飯場で一つ釜のメシを食った仲間の数は百単位ではなく千単位だろう。そのなかでNと特別に気が合ったわけではない。しかし、思い出してこうして書いているとひどくなつかしい。

そういう、奇妙な縁をつくるのが、いいところのない人夫出し飯場のわずかな功徳だろうか。

トコロモシラヌ　ナモシラヌ……とは昔の遊廓の女たちの歌だそうだが、人夫出し飯場では男同士がそんな具合にふれあって、ほんの少しだけ、たとえばナマエ（姓のみ）や顔つきや酒ぐせなんかのどれか一つを印象にとどめる。そして別の場所でまた出会ったり出会わなかったり。

現役で人夫出し飯場を出たり入ったりしているともだちのSに会えたら、昔からキチンと手帖をつけている（現場名、作業内容、早出残業歩増しの有無、諸式の控えからめしのおかずまで）Sの手帖をそっくりここへ紹介させてもらおうと考えていた。

しかしSはドヤに荷物を置いて遠くへ仕事に出かけて会えない。これが心残りだ。

それからもう一つ、人夫出し飯場のオヤジはほとんどすべて朝鮮人、あるいは韓国人だと私の体験は思わせるのだが、建設業について書いた本でも「在日」朝鮮人・韓国人を書いた本でも、そこにペンを及ぼしたものにぶつからない。

（76）